



人間文化研究機構（NIHU）プログラム・イスラーム地域研究第二期終了に寄せて

桜井 啓子 早稲田大学国際学術院教授・イスラーム地域研究機構長

『イスラーム地域研究ジャーナル』第四号（二〇一二年）の巻頭に「新しい船出」を書いてから四年の歳月が過ぎた。今年度は、二〇一一年度から始まった人間文化研究機構（NIHU）プログラム・イスラーム地域研究第二期の最終年でもあるので、改めてこの四年間を振り返えることにしたい。

早稲田大学イスラーム地域研究機構は、東京大学、上智大学、京都大学、財団法人東洋文庫にそれぞれ設置された研究拠点と連携し、二〇〇六年度より二期一〇年に及ぶ人間文化研究機構（NIHU）プログラム・イスラーム地域研究の中心拠点として研究活動に従事した。現在では人間文化研究機構から早稲田大学イスラーム地域機構に派遣されている三名の研究員（西村淳一主任研究員、吉村武典次席研究員、長谷部圭彦次席研究員）が、各拠点に派遣されている研究員と協力し、拠点間、研究者間の連絡・調整などを一手に引き受け、研究会、セミナー、国際会議を下支えしている。また、イスラーム地域研究の活動を国内外に

発信する上で重要な役割を果たしている和文・英文によるポータルサイトの運営やアラビア語・トルコ語・ペルシア語など八か国語によるパンフレットの公開などにも尽力してくれた。彼らの献身的な働きなくしてイスラーム地域研究を推進することはできなかった。ここに記して改めて御礼を申し上げたい。

中心拠点としての業務とは別に、早稲田拠点は、「イスラームの社会的実践と理念」というテーマのもと（一）原典研究を通じて理念研究、（二）イスラームの理念に基づく社会的実践という二つの視点から研究班を設置し、研究活動に取り組んできた。研究成果は、「イスラームを知る」シリーズ（山川出版社）、New Horizons in Islamic Studies Series（ルートリッジ社）、『イスラーム地域研究ジャーナル』、その他、単行本や論文として公表してきた。詳細は、『イスラーム地域研究ジャーナル』の各号をご覧いただきたい。

人間文化研究機構（NIHU）プログラム・イスラーム地域研究と並行して、早稲

田大学イスラーム地域研究機構は、二〇〇八年度より文部科学省による「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」（二〇〇八年度―二〇〇九年度）、「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」（二〇一〇年度―二〇一一年度）を実施した。この事業においても、機構は、東京大学、上智大学、京都大学、東洋文庫に設置された各拠点を結ぶネットワーク型共同研究の中心拠点として、イスラーム地域研究を推進した。二〇一三年度には、共同利用・共同研究拠点として文部科学大臣により再認定され、引き続き研究活動を行っている。

機構は、この他にも様々なプロジェクトを推進してきた。それを担っているのは、人間文化研究機構から派遣された三名の研究員に加え、早稲田大学イスラーム地域研究機構に所属する四名の研究員（福田安志上級研究員、吉村貴之主任研究員、勝沼聡研究助手、秋山徹研究助手）である。

機構が実施してきた重要な事業の一つに日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤



人間文化研究機構 (NIHU) プログラム・イスラーム地域研究、最後の合同集会を終えて記念撮影。
みなさま、長い間ご苦労様でした！ (2016年1月30日)

形成事業がある。二〇一一年から二〇一三年度までは、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院と「イスラームと多元文化主義―イスラームとの共生に向けた基礎的研究」を実施した。二〇一四年度からは、この発展型として、新たにニューヨーク大学アブダビ校を加えた日本学術振興会拠点形成事業B「アジア・アフリカ学術基盤形成型」として、三校による共同研究をスタートさせた。二〇一四年度は、クアラルンプールで、二〇一五年度は、アブダビで国際会議を開催した。最終年度は早稲田での開催を予定している。この他にも、二〇一三年―二〇一四年度、鹿島学術振興財団研究助成を受け「乾燥地域における水資源管理をめぐるイスラームの合意形成―ナイル川流域とアラビア半島の比較―」というテーマで共同研究を実施した。

機構は、研究成果の社会還元にも取り組んできた。学生向け講演会シリーズ「働く日本人のイスラーム・現場からの声に耳を傾けよう！(二〇一三―二〇一四年度)を実施し、その成果を『イスラーム圏で働く、暮らしてビジネスのヒント』(二〇一五年、岩波書店)として出版した。

機構は、毎年、数多くの国際会議、国際セミナー、国際共同研究を海外の研究者・研究機関と共同して開催している。人文・社会科学の国際化は、日本の学術界に共通する課題であるが、機構は、イスラーム圏の研究者、欧米の研究者、日本の研究者と多様な背景をもつ研究者・研究機関を繋げながら日本発イスラーム地域研究の国際化

に向け多大な努力を続けてきたと自負している。

機構の研究成果は、共通の関心やテーマのもとに多様なレイシプリンの研究者が集まり、議論し、刺激し合い、切磋琢磨した結果である。特に海外の研究者との共同研究では、考え方やアプローチの違い、互いの弱点や強みが明らかになるが、それこそが共同研究の意義といえるだろう。

一方で、大型プロジェクト運営のむずかしさや負担も痛感した。プロジェクトを支える膨大な事業運営負担は、研究者自身、特に若手研究者に重くのしかかる。どのようになれば事業運営負担を軽減し、研究に多くの時間とエネルギーを割くことができるのか、模索が続いている。また現地との長期にわたる交流と信頼関係の上に初めて成り立つ地域研究は、数年単位の問題解決型のプロジェクト研究には馴染みにくいなど、異文化を理解するための学問はどうあるべきか問い続ける日々でもあった。イスラーム地域研究の推進を通じて多くの成果を得たが、まだまだ課題も多く道半ばである。

二〇一五年度をもって、これまで機構を支えてくれた研究者のうち六名は、機構を去り、新たな道を進む。早稲田大学イスラーム地域研究機構での研究活動、研究事業運営のノウハウや研究ネットワークを、これからの研究活動に是非活かしていただけたらと切に願う。